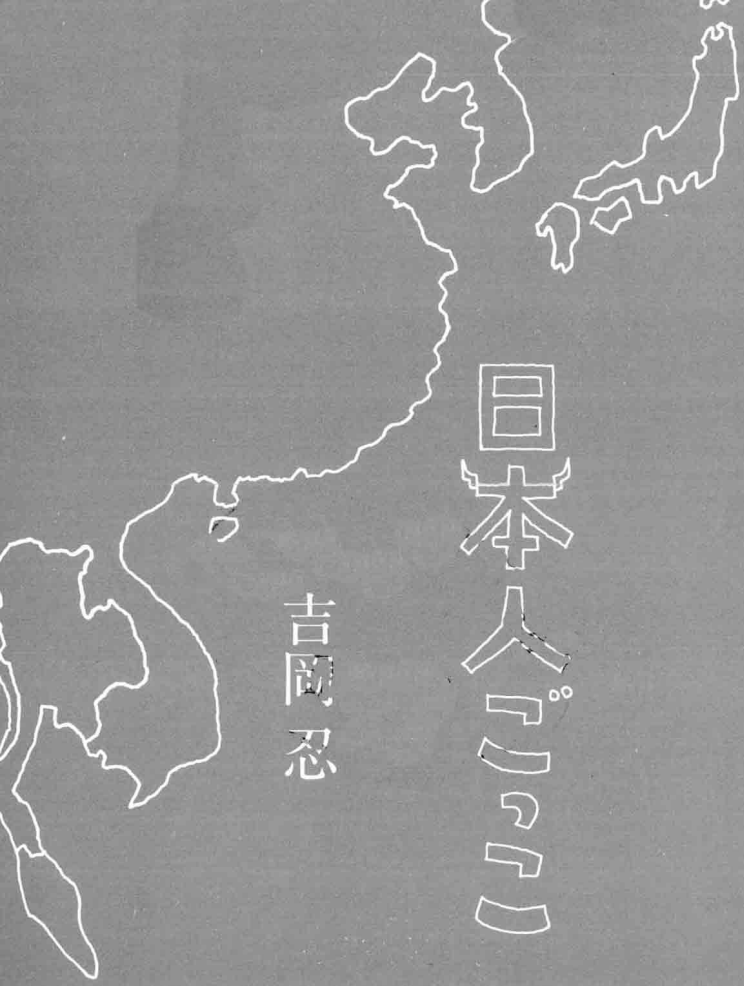
日本人ごっこ

吉岡 忍



日本人のこころ

吉岡 忍

文藝春秋

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

ノな視点から描いた『堕落の夏』で講談社ノンフィクション賞を受賞。その綿密な取材力、鋭い切り口、豊かな表現力には定評がある。著書に、上記のほか『散るアメリカ』(『ガリバーと巨人の握手』を改題)『技術街道をゆく』『「事件」を見にゆく』『島国へ帰る』『死よりも遠くへ』などがある。

日本人ごっこ

1989年12月25日　第1刷
1990年4月25日　第5刷

著　者　吉岡　忍

発行者　豊田健次

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3－23（〒102）
電話(03)265－1211

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　大口製本株式会社

＊定価はカバーに表示してあります

©Shinobu Yoshioka 1989
Printed in Japan
ISBN4-16-343980-3

目次

プロローグ――カンティアは日本人になった　7

Ⅰ

「ユウコ」の足跡　17

ある日、少女はスポーツ・スタジアムに現れた。そして、人のよさそうな管理人に言ってみた。「わたしは日本人です」。この瞬間から、少女の〝楽しい百日間〟がはじまった。

Ⅱ

大使の娘、国境の町をゆく　71

女子学生とふたりの警官を引き連れた視察旅行。生徒の前で少女は演説した。「タイ人は怠けています。日本人を見習うべきです」と。得意の絶頂で、彼女が見たものは何？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

Ⅲ 黄金の三角地帯（ゴールデン・トライアングル）の故郷 132

アヘン作りの山々に囲まれたタイ最北の小さな貧しい村。そこで少女は育った。「わたし、バンコクに行きたい」。家を飛び出した彼女のまわりに、日本の商品が輝いていた。

Ⅳ 沸騰するバンコクの夢 201

デパート、スーパー、ファッション、テレビ、雑誌……。どこに行っても日本だらけ。この街はどこかが狂っている。「もう夢は見たくない」。雑踏のなかで少女は思った。

エピローグ――カンティアはタイ人になった 277

あとがき 297

日本人ごっこ

プロローグ――カンティアは日本人になった

少女に会いたかった。十四歳、ひょっとしたら、もう十五歳になったかもしれない。日本人に化けた、タイの少女だ。

少女の名前は、カンティア・アサヨット。しかし、彼女は本名も素性も隠して、「ユウコ」という名の、タイ駐在「日本大使の娘」になりすました。

そして、首都バンコクの郊外にあるスポーツ・スタジアムに行って、管理人にお小遣いをせびったり、郊外のマンモス大学のキャンパスに出入りし、日本に憧れている学生たちに取り入って面倒をみてもらったりもしていた。そればかりか彼女は、ふたりの警察官を護衛につけて、地方視察するという大胆なことまでした。

カンティアはどこに行っても、みごとに日本人少女になりきった。カタコトの日本語をしゃべり、日本の風物について説明し、日本人の勤勉さについての演説までしていたとい

うのである。

他方、スタジアムの管理人も学生たちも、それに警察官も、はじめて接する日本人に興味を抱き、できるかぎりの歓待をしたのだった。誰も、少女がニセの日本人だなどと疑わなかった。

そんな奇抜な少女がバンコクに出没したことを知ったのは、一九八六年九月初旬、たまたまバンコクの古いホテルに滞在していたときのことだった。チュラロンコーン大学で近代化論を講じるタイ人の友人が、私が滞在していたホテルに訪ねてきた。真夜中に近い十一時である。

四十歳そこそこという、私とは同年輩の助教授だが、朝四時に起床し、夜九時には眠くなる、という習性の持ち主だった。その習性は、たぶんに最近のバンコクの都市環境によって作られたものだ。早起きして、まだ暗いうちに郊外の家を出て大学に向かわないと、市内のすさまじい交通混雑に巻き込まれ、バスで四十分の距離が二時間半もかかってしまう、というのである。

たしかにバンコクの交通事情は、ひどかった。車の列はいたるところで渋滞し、排気ガスがたちこめる。乗用車やトラックの運転手も、バスやタクシーの乗客も、動かない車のあいだを駆け抜けていくオートバイの乗り手も、みんな苛立ち、殺気だっているように感じられる。そこに、炎のような激しい陽光が降り注いでくる。ここでは、街が沸騰してい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

る。

気温や湿度だけのことなら、バンコクよりもっと過酷な土地は世界のあちこちにあるだろう。しかし、街が煮えたぎっていると感じさせるためには、そこに混乱や混沌が渦巻いていなければならない。人があふれ返り、食べ物の匂いと腐臭とが入り混じって漂い、車やネオンや高層ビルなどが無秩序に衝突しあっているような状態。

日本人に化けた少女が現れたのは、そんな混沌とし、煮え立つような街だった。

友人の助教授はがぶ飲みしたコーヒーで眠気を追い払いながら、久しぶりの世間話をつづけた。十代の後半と二十代のはじめに日本の高校とアメリカの大学に国費留学した彼は、日本語も英語も流暢にこなした。小柄で、眼鏡をかけ、ときどき剽軽なジョークを飛ばすのだが、その様子がいかにも利発だったにちがいない子供時代を彷彿とさせた。

彼はバンコクという都会の子供ではなかった。タイ北西部、チェンマイ近くの田舎で育ったという。家はコメを作る小さな農家だった。地元の高校から選ばれて日本に留学したとき、両親は首都まで見送りにこなかった。いまも息子の暮らすバンコクには、めったに出てこない。バスでも汽車でも飛行機でも、乗ったとたんに、ひどい乗り物酔いにかかってしまうからだ。

田舎から都会に行き、そこからさらに外国にでかけるなどというのは、彼の親たちの世代には想像もつかないことだった。ひとつの村や町に生まれたら、長距離バスや列車や航

空機に乗るような旅行には出ず、ずっとそこで暮らすというのが、ひとつ前の世代の生活様式だった。そのことは多少の時期のずれはあるにしても、タイでも、日本でも、あるいは多くの国々でも同じことだった。

だが、そのような安定、あるいはそのような停滞は、いまどこの国、どこの社会でも揺さぶられ、崩れている。人々は就職や出稼ぎで都会に出てゆき、さらに国境を越えて、遠洋の漁場で働き、見知らぬ繁華街のスナックやバーで男たちの相手をし、外国の道路や港湾の建設に雇われていく。企業進出とともに外国の街や郊外に長期赴任する人もいるし、ときには移民したままもどってこない人々もいる。

私たちがバンコクのホテルの一室で雑談しているというのも、考えてみれば、そうした大きな流れの一部だった。タイ人の彼は留学で外国に行き、大学で教えるようになってからも、客員講師や国際会議で各国を飛びまわり、日本人の私は私で、いつもパスポートを持ち歩くような仕事をしている。

そして、その雑談の途中で、彼は日本人に化けた少女の話をしたのである。

「最近、バンコクに変な女の子が現れたんだ。新聞に大きく出ていたよ。これがちょっとした話題になってね」

その二週間ほど前の八月二十日、タイ最大の大衆紙『タイ・ラット』が第一面で、「日本のことで頭のなかがいっぱいの少女が出現」と報じていた、というのである。第一面の

中段、写真まで載せた目立つ記事だったという。

あとで新聞社に行って調べてみると、当日の朝刊には、オカッパ髪の少女の上半身の写真が掲載されていた。数センチ四方のモノクロ写真は警察のなかで撮影されたらしく、ぼんやりした背景には乱雑に積み上げられた書類の山と制服警官が写り込んでいる。

その前に、丸首の無地のTシャツを着た、いくらか太り気味の少女がいる。顔の輪郭は丸い。わずかに腫れぼったい瞼は、一般のタイ人のように二重ではなく、一重のように見える。小さく、ちょっと厚めの唇が、まだ子供っぽい面影を残している。

しかし、あまり鮮明ではない新聞写真を見るかぎり、タイのどこにでもいそうな女の子に見えた。

記事によれば、その少女カンティアは五月ごろからほぼ百日間にわたってスポーツ・スタジアムの管理人や学生たちをだましていたという。何かのはずみでそれが露顕し、怒った学生たちが少女を警察に突き出した。だが、彼女は逮捕も補導もされなかった。たいした実害がなかったことが、その理由だった。

カンティア・アサヨットはその二、三年前、バンコクからは約八百五十キロ離れたタイの最北部、ビルマ（現在は、ミャンマー）やラオスと国境を接しているチェンライ県の田舎から首都に出てきた。ルアン村という、地図にも載っていないような村だ。逆算すれば、十二歳前後のときだったはずである。

家が貧しかったから、まだ子供であっても働きに出なければならなかった、と新聞は伝えている。だが、貧困は現在のタイ社会にはほぼ普遍的に存在する。少女の家がどの程度の経済状態であったのか、またバンコクに出てきてからの生活ぶりはどうだったのかについて、記事からはうかがうことはできなかった。

また記事をいくら読んでも、彼女が日本人になりすましたきっかけや経緯もはっきりしなかった。「カンティアは記憶力が非常によく、話し上手でもあったので、多くの人々が長いあいだ、だまされていることに気づかなかったようだ」とあるだけだ。

「いったい何が、彼女を動かしたのだろうか」と、記者は書いている。そして、こうつづける。

「日本大使の娘になりすますためには、日本語を勉強するなど、大変な努力が必要だったろう。たしかなことは、少女が日本からきた女の子だと名乗ると、まわりの人々の注目を集めたということだ。実際には、彼女は貧しい家に生まれ、誰も関心を向けないような子供だった。それが、いったん日本人の少女となると、人々は掌を返したように態度を変えたのである」

記事はこう結ばれている。

「これはタイ版シンデレラ物語とは言えないだろうか」

なぜこんな女の子が出現したのか、どうしてまた大の大人や学生たちが年端もいかない

少女にころっとだまされてしまったのか？　記事から感じられたのは、タイの現代に起きた出来事をいったいどう理解したらいいのだろうか、という戸惑いだった。

私にしても、それは同じ思いだった。少女の頭のなかに詰まっていた「日本」とは、何だろうか。だまされた学生や大人たちの頭のなかにも、「日本」と聞いただけで響く何かがあったのではないだろうか。それはいったい、何なのだろう？

友人の助教授と話したあとの数日、そんなことを考えながら、私は炎暑のバンコクを歩きまわった。

街には日本製品があふれ返っていた。走っている車の十台に九台までがトヨタや日産やホンダだったし、テレビや冷蔵庫の大半も日本のメーカーのブランドだった。デパートやスーパーマーケットも、わざわざ日本から進出し、繁華街をにぎわせていた。

ハンバーガー・ショップやドーナツ・ショップにたむろしている若者たちのTシャツにも、『札幌シティマップ』だの『六本木少女』だの『さてんのにいちゃん』だのといった日本語のイラスト風の文字が踊っている。バス停留所には、『原宿ウォッチ』なる腕時計の大きな宣伝看板が出ているのだった。

日本のデパートの一階にあるハンバーガー・ショップで冷えたコーラを飲み、暑さと湿気でふやけた体を休めながら、やがて私は戦後日本の一時期にさかんに指摘された「アメリカナイゼーション」との類似を考えていた。アメリカの歌手や映画スターへの憧れ、ア

メリカ版ホームドラマの影響、西海岸風俗の席巻、英会話ブームの根強さ、そして、このごろでは、ヤッピー風ビジネスマンを気取ったエリート気分の蔓延(まんえん)……。

しかし、もっとも過激に、またもっとも軽薄にアメリカ風俗が模倣された時期においてすら、走っている車や、台所におさまっている家電製品の九割までがアメリカ製であることはなかった。銀座や新宿の表通りにデパートのメイシーや、スーパーマーケットのシアーズやJCペニーが並んだこともない。アメリカ製品の看板が街を埋めつくしたこともなかった。

日本のアメリカナイゼーションなどは、児戯に等しかったのかもしれない——ここ、バンコクであらためて振り返ってみれば。そう思われるほどに、この街には日本の商品が氾濫し、日本企業の看板や広告があふれ返っているのだった。

しかし、これはタイだけのことではないのかもしれない。日本ではもう十数年来、「国際化」が合言葉のように言われつづけている。商品の輸出に加えて、工場の進出も急速に進み、日本ブランドは世界各地にあふれているのではないか。

ハンバーガー・ショップの窓ガラス越しに、私は首都の町並みを眺めた。街にはあいかわらず暑さと湿気が充満し、そのなかを車と人とがぶつかりあうように混雑していた。そんな様子を眺めながら、私は考えていた。

もう一度、この街にやってくることになるだろう。そして、そのときには、あの少女に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong